

## Contents

### 02-05

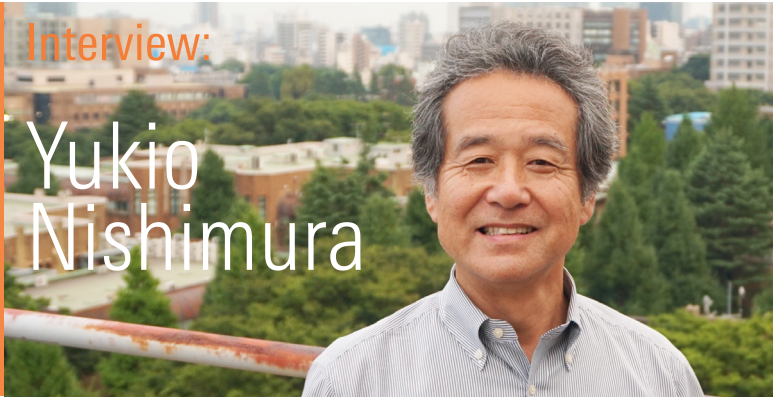
インタビュー

## 国際的視点から 日本の風景をとらえる

東京大学 西村幸夫 教授 × みずほ総合研究所 久嶋万祐子 清衣里奈

Interview:

## Yukio Nishimura



06-07	Projects	08	Reports	09	Laboratory
清水建設の土木広報	海野展靖	第3回イブニングセミナーと秋の見学会	王尾英明	ユニークラボ探訪第1回	白根哲也
10	News Letters	11	Message	12	Opinion
産学共働若手勉強会 留学生サマーセミナー	金子雄一郎 鳩山紀一郎	広報媒体リニューアルのご挨拶	茶木環	変化への適応リスクを超えて	屋井鉄雄

## お知らせ

## Information

### 第4回 地域交通とライドシェア： 地域社会とウーバー社による取り組み

イブニングセミナー

●趣旨 バスや鉄道の撤退が相次いでいる地方では利用できる公共交通機関が少なくなり、圧倒的に自家用車に頼っているのが実情です。車を持たない住民や高齢者は、買い物や病院通いに公共交通機関で行こうとすると数時間かかってしまうこともあります。こうした地域に、ライドシェアを導入する社会実験が行われています。今回は、地域モビリティに詳しい岡村敏之先生(東洋大学)より地域交通の実態について解説いただいた後、ウーバージャパン株式会社政府渉外・公共政策担当部長の安永修章氏に社会実験の最近の動向についてご講演いただきます。

●日時 12月5日(火) 17:30～19:15 その後懇親会  
●場所 東京理科大学 神楽坂キャンパス2号館 223教室

#### ●話題提供者

東洋大学 国際学部国際地域学科 教授 岡村 敏之  
Uber Japan(株) 政府渉外・公共政策担当部長 安永 修章

●懇親会 東京理科大学  
神楽坂キャンパス8号館地下1階多目的ホール

●参加費 セミナー 無料  
懇親会 3,000円を予定(領収書を発行します)

### 橋の臨床成人病学入門

特別講演会

●趣旨 最近の社会問題ともいえる「社会インフラの老朽化」について、実際に何が起きているのか、そして、これからこの問題に対してどのように立ち向かっていくのか、長年専門としてきた橋梁を中心に、東京都市大学学長の三木千壽先生にご講演いただきます。

●日時 2018年1月19日(金) 17:30～19:00 その後懇親会  
●場所 鹿島建設(株) 赤坂別館食堂  
●講演者 東京都市大学 学長 三木 千壽  
●懇親会 鹿島建設(株) KIビル地下食堂  
●参加費 セミナー 無料  
懇親会 3,000円を予定(領収書を発行します)

### 第5回 ここまで進化した天気予報の技術！ ～社会はこの進化をどう活かすか？～

イブニングセミナー

●日時 2018年2月19日(月) 17:30～19:15 その後懇親会  
●場所 日本大学 駿河台キャンパス1号館  
●話題提供者 気象庁気象研究所 環境・応用気象研究部長 高藪 出  
東京大学大学院・工学系研究科 准教授 知花 武佳

インタビュー:

# 国際的視点から 日本の風景をとらえる

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻

西村幸夫 教授



**地** 方のまちづくりを支援される一方、日本イコモス国内委員会委員長として世界遺産登録の審査もされている西村幸夫先生に、国際的な視点から見る日本の風景の魅力やこれからのまちづくりのポイントを語っていただきました。  
〈本文中は敬称略〉

## 日本の風景の変遷

——伝統的な日本の風景の特徴について、お聞かせください。

**西村** 日本は、アンジュレーションに富み、山や谷や海に「囲まれた空間」が多いという地形的な特徴があります。遠くの地平線が見える広い空間ではなく、何層にも連なった山々に囲まれた空間が多く、今も地方都市に行くとそういった風景が残っています。そしてその地域に住む人々は、里山に対し強いアタッチメントを持っています。例えば「手前の山は生活の山」「奥の山は聖なる山」など、その地域に固有の文化を育んでいます。日本の風景は、風景だけでなく「囲まれた空間」からなる文化が大きな特徴と言えるでしょう。

——一方で、伝統的な日本の風景は近現代で大きく変化したと思います。この変化の背景は何だったのでしょうか。

**西村** 明治維新もありますが、やはり戦争が大きなキーワードでしょう。日本は100都市以上が戦災にあったため、歴史的な建造物は壊され、近代は似たような建造物が建てられました。たとえば、住宅は商品として扱われるようになったので、昔の庄屋のように百年持つ家ではなく、建物の更新サイクルが短く似たような家を売るようになりました。また、駅前降りたらどこも看板がたくさんあり、少し高い建物がある、といった似たような風景になってしまいました。

似たような風景が広がった背景には、もう一つ、都市と農村の「境目」がなかったことも挙げられると思います。都市に城壁がなかったことから、昔から都市は広がったり縮んだりを繰り返していたため、日本人は都市の変化に寛容と考えられます。そして、戦後の高度経済成長期に、農村が潰されて郊外型の都市が広がってきたことも、特に意識なく受け

入れてきました。

——伝統的な日本の風景を保護する上で、ネックになっていることはありますか。

**西村** 高度経済成長期は、都市化によって生じる交通渋滞などの課題にアプローチする「課題解決型」で都市計画が進められました。右肩上がりの社会ですので様々な課題が生じますが、全体的で公平な制度が導入されました。一方で、歴史的な景観・まちの保護は、京都などの特別な都市だけのこととして「別格扱い」されてきました。

現代の成熟社会はもう右肩上がりではないので、ストックを大事にする、個性を発揮するということが見直されてきています。社会の流れや感覚が変わってきているように感じます。特に、最近の若い人は成熟社会で育っているため、古いものがむしろ新鮮で、良いものは良い、といった見方が素直に純粹にできる人が多いですね。こういった感覚は、景観を保護する上でとても大事だと思います。

一方で、都市計画などの制度が変わ



# Interview: Yukio Nishimura

聞き手:

みずほ総合研究所

久嶋万祐子  
清 衣里奈

(ともに広報部会員)

るのにはまだ時間がかかります。個性を伸ばすことは、公平性を重視する行政の考え方と合わないからですが、地方創生の流れで地方独自の戦略が求められるようになってきていると思います。

——【事例①村上】西村先生が委員長(村上市歴史的風致維持向上協議会)を務められた、村上(新潟県村上市)の事例をご紹介しますでしょうか。

**西村** 村上には城下町で町屋が並ぶ歴史的な道があるのですが、昔から道路拡幅計画があり、賛成派と反対派が非常に激しく対立しました。右肩上がりの社会であれば何とか対応し

なければならないということでしょうが、これから人口や交通量が減少する中で、本当に工事が必要なのかということが焦点でした。結果的には、途中まで道路拡幅工事が進んでいましたが、その先まで拡幅するほどの交通量がないのだから今その歴史的な道を壊して魅力を消してしまうのではなく、残すことでまちの個性を活かそうことになりました。地域の強みを大事にするカルチャーに変えていかなければならない、ということが明確にされた事例と言えます。細かく見ると、冬場に歩道が確保できないといった課題などがありますので、細かな改善が必要です。これまでの制度では、公平性が求められるため例外を認めず、道路拡幅ありきで議論されてきたのでしょうか。これからは、個別の課題に細かくアプローチすることが必要だと思います。

——【事例②鞆の浦】映画「崖の上のポニョ」のモデルといわれる鞆の浦(広島県福山市)の架橋問題について、日本イコモスから提言を出されましたね。

**西村** 鞆の浦は、村上と違い道が狭くて困っている人がいて、バイパスが必要な状況でした。日本イコモス

からは、鞆の浦を埋立て架橋して港の魅力を捨てるのではなく、山側にバイパストンネルをつくる代替案を提言しました。トンネル工事は大変で問題もない訳ではないのですが、その方が工期も短く安くできますので、総合的にみると都市の個性である港の魅力を捨てる前に代替案を考えるべきではないかと。また、バイパスもすぐできるわけではないので、既存の道にちょっとしたこと、たとえば信号を設置するとか小さな空地进行を車のすれ違い時のスペースとして活用するとか、現状を改善する工夫をセットで考えなければならないということも申し上げました。これまでは、埋立て架橋バイパスでないとし、利便性は改善されないとして、ほかに選択肢が示されていませんでした。利便性の改善だけでなく、鞆の浦の個性である景観を守ることに関心が高まってきたことが、今回の議論を深めた背景だと思います。

——2つの事例をお聞きすると、日本社会の成熟により「風景」の位置付けが変わってきていると感じます。

**西村** 例えば、鞆の浦には、この5年ほどで新しいお店がいくつかできました。今まであまり考えられませんでした。田舎で新しいビジネス



事例①村上(写真:村上市観光協会)



事例②鞆の浦(写真:福山観光コンベンション協会)



西村先生(右)のお話へ惹き込まれる久嶋(左)、清(中)両部会員

をする若い人たちが増えてきています。この傾向は、昔からの風景や建物が自分の生活に馴染む感覚、つまり町屋暮らしや近所づきあいを面白い、そういった環境で子供を育てたいといった感覚を持つ人が増えていることによると思います。これまでは匿名性の高い都会が好まれる傾向にありましたが、匿名性が高いということは安心もできないという側面もあるのです。昔ながらの風景とそこにあるコミュニティの中で、自分のライフスタイルを表現していくことが一つの価値観となってきたと言えるのではないのでしょうか。

インターネット環境により、どこでもビジネスができる環境になりつつあります。また、交通アクセスや車の技術も発達していますので、田舎も居住の選択肢になる、むしろその選択が一般的になることも考えられます。但し、このような現代的価値観から見ても、田舎ならどこでもよいというわけではありません。魅力的な風景などの地域の個性がなければ人は集まりませんので、個性を発信し「選ばれる田舎」になることが必要だと思います。

### 国際的な視点から見た日本の風景

——アジア諸国と比較して、日本の風景はどのような特徴がありますか。

**西村** アジア諸国と比較したときの日本の特徴は、都会と同レベルの生活水準を享受することができる便利な田舎が残っていることだと思います。他のアジア諸国でも田舎は残っていますが、インフラが整備されていないので住みづらく、都市と地方に大きな格差があります。日本には、住む場所としての選択肢となる田舎がきちんと残っており、それが日本の魅力でもあり、大事にしなければいけないと思います。この背景には、これまでの政治において農村にそれなりの投資を行ってきたこともあると思います。

——ヨーロッパとの比較では、どのような特徴があると言えるのでしょうか。

**西村** 日本は人口密度が高く、都市化が急速に行われてきました。一方で、ヨーロッパの社会は昔から安定・成熟しているという違いがあり、一概には比較できません。ただ、日本の社会も成熟してきているので、ヨーロッパのまちに近づいていくの

ではないかと思います。ヨーロッパの特徴として言えるのは、自分たちのまちに自信をもって、自分の地域の個性を自信をもって発信していくことができていることです。ですから田舎も元気ですね。農業がビジネスとして確立されていることも影響しているのだと思います。その点では、日本でも農業を競争力のあるビジネスとしてやれると、変わってくるのではないのでしょうか。

——ツーリズムの観点から日本の風景を見ると、どのような魅力があると思われますか。

**西村** 日本に来る観光客にはさまざまな人がいますので、何を面白いと思うのかは人それぞれです。渋谷のスクランブル交差点をスペクタクルなものとして魅力に思う人もいますし、歴史的なまちが好きな人もいます。また、例えばパチンコ店と神社が隣り合っていることがあるように、多様なものが混在している状態に違和感がないことが面白いと思う人もいれば、日本の安定した社会から生まれる安心感に魅力を感じる人もいます。田舎にとって大事なものは、どんな人に来てほしいか、そのための自分たちのまちのアピールポイントを明確にし、自信をもって売り出していくことだと思います。

——西村先生は世界遺産審査にも携わられていますが、世界遺産審査とまちづくりは少し毛色が違うものを感じます。

**西村** 世界遺産は、これまでは誰が見てもその価値がわかるモノが登録されていましたが、近年では、世界遺産でもストーリー性を重視するようになってきています。これはまち



づくりで自分がずっとやってきたことですが、ようやく認められるようになってきたんだという実感があります。世界遺産では、世界から見て意味のあるストーリーを不動産・建物・土地の「モノ」として語る必要があります。例えばその国で一番古い建物であったとしても、ストーリー性が欠けていけば世界的に魅力のあるものとして見なされないこともあります。その国で一番古い建物は、どの国にも存在しますからね。一方で、まちづくりでは世界と競争する必要はありません。頂点を目指すのではなく、それぞれの地域の個性を活かすことが重要です。私自身としては、地域で頑張っている人を応援することが自分の役割だと思っていますが、世界遺産という大きな目線が小さなまちづくりにも活きると思っています。取り組んでいます。

### 世界に紹介したい日本の風景

——西村先生が世界に紹介したいと思う日本の風景とは、どのようなものがありますか。

**西村** 実際に外国からのお客様を案内することもあります。散居村の風景はぜひ紹介したいと思います。

例えば北陸・砺波の防風林など、開発があまり進んでおらず生活の風景が見えるところは素晴らしいと思います。風景を見ながら日本人として誇らしいと思える貴重な場所ですし、日本には

そういった風景がまだ所々に残されています。地元愛が強い地域性が表れているのかもしれませんが、こういうところを大事にするために、がんばって働こうと思えますね。

——では最後に、都市化の中で光る風景をご紹介いただけますでしょうか。

**西村** 東京については、東京駅がその個性を象徴していると思います。大都会の都心にあれほど大きな駅が存在し、かつ皇居と前の空間が計画的に整備できているのはすごいことだと思います。大阪や名古屋などの他の都市の駅は、都市のエッジに位置していることが一般的ですが、東京駅は都心にあり、かつ新幹線が開通して路線が大幅に拡大しても、100



散居村 (写真: 南砺市観光協会)

年間ずっと同じ場所に位置し続けることができている。100年にわたって同じ駅舎が使われ続けたという点も、他に例を見ない点です。これは都市計画のおかげであり、最初にとんでもなく大きい駅を作り、日本橋側のヤードを十分に確保することができたから、可能になったのです。そういう意味で、皇居側から見た東京駅の風景は、東京を象徴する都市化の中で光る風景だと思います。都市計画分野と交通分野が織り成した風景とも言えますね。

西村先生のお話にもあったJR東京駅の丸の内駅前広場整備について、次号の会員企業百景でお伝えします。



東京駅



皇居までの道

## Projects:

## 会員企業百景

## 「家族の心まで近づけたい。」と「暮らしのそばに、じつはドボク。」

— 清水建設の土木広報 —

## 清水建設株式会社

土木総本部 土木企画室 企画部長

海野展靖

清水建設の土木部門として、一般の皆さんにも土木事業が日々の暮らしを支えていることを知っていただきたいという想いから、2015年度より土木をテーマにした広告を制作し展開しています。本稿では、全社的な広報戦略と、土木部門としての取り組みを紹介させていただきます。

## ■「子どもたちに誇れるしごとを。」

当社は、総合建設会社という実質的なB to B企業であり、一般の消費者に直接、モノやサービスを提供するビジネスではありません。従って、普段の広報宣伝活動は、広く世間一般に当社のイメージアップを図る目的で展開しています。その母体となっているのが、2007年5月に発足したシミズバリュー推進委員会です。社長を委員長とした、複数の役員からなるこの委員会で、全社の広報活動戦略を決めています。

その活動において、08年5月にコーポレートメッセージ「子どもたちに誇れるしごとを。」を発表、続いて6月に第1弾テレビCM「いつかきっと篇」を制作、その後、「つくるに夢中篇」、「チームで走り続ける篇」など、今ではシリーズ7作品を数えま

す。この間、新聞でもテレビCMと連動した広告を掲載してきました。

B to B企業であることから、一般の生活者向けに広告を出しても、受注に直接結びつくわけではありませんが、それでも広告宣伝活動を継続しているのは、当社の仕事を広く知っていただきたい、建設業界そのものの理解を深めていただき魅力を感じてほしい、建設業界の担い手として、建設業を目指す方々が多く出てきてほしい、との願いからです。

## ■「家族の心まで近づけたい。」シリーズ

前述の全社方針を受けて、土木部門として2015年度からグラフィック広告の企画・制作をはじめました。訴求のポイントは、施工案件を直接PRすることはせず、社会インフラによって、人々の暮らしがどのように変わっていくか、またどのような生活を提供できるか、といった考え方を「ひと」を中心としてあらわすというものです。そこで、インフラストック効果による、「家族の心まで近づけたい。」シリーズを発表しました。

第一弾は、国土交通省東北地方整備局 国道45号吉浜道路を題材としました。(広告1)トンネルの開通で移動が便利になり孫たちの帰省を楽し



## 広告1

みに待っているおばあさんの様子を、写真と以下のボディコピーで表現しました。

—母は、「峠にトンネルができたから」とだけ言った。—

帰る帰ると言って、正月にしか行けなかった岩手の実家。

母は、孫が来るのを首を長くして待っているに違いない。

正直、実家までは遠かった。

それがいまや、まっすぐ伸びるトンネルで峠道避けられる。

—1本の道路が、帰省をふやすかもしれない。—





広告2

第二弾は、国土交通省関東地方整備局 圏央道桶川北本地区函渠を題材としました。(広告2) 圏央道の開通で幼い息子と過ごす時間を楽しみにしているお父さんの様子を、写真と以下のボディコピーで表現しました。——自然を教える、いちばんの近道になりそう。——

子どもには、ドロまみれになるまで遊んでほしい。ちょっと山や海までと思うものの、遠出は道が混んで億劫だった。

それが今度、あの道がつながるといから渋滞知らずで行けるかもしれない。さあ、次の週末はどこへ行こうか。——つながる道路で、行きたかったあちこちへ、遠くスムーズに。——

第三弾は、国土交通省四国地方整備局 鹿野川ダム再開発を題材としました。(広告3) ダムの再開発によって、昔より安心して暮らせる、川が穏やかになっていくさまと頑固だったおじいさんが穏やかになっていくさまを重ね合わせた様子を、写真と以下のボディコピーで表現しました。——次に逢うときは、もっと穏やかになっているだろう。——

めずらしくあの頑固親父から電話がきた。よほど孫と遊びたいらしい。雨は三日三晩降ったそうだが、帰省するには心配ないという。大雨のたびによく氾濫した地元の川も、ダムができて昔より安心して暮らせるようになった。それがもっと良くなるそうだから、ますます親父の電話が増えるかもしれないな。——ダムで、川と寄り添う暮らしを守りゆく。——

■「暮らしのそばに、じつはドボク。」シリーズ

今年度からは、新たにインフラリズムで土木の魅力を広くPRする、「暮らしのそばに、じつはドボク」シリーズを開始し、第一弾として「ダムパシヤ」と名付けた広告宣伝活動を展開しています。(広告4) これは、日本最大の女性写真サークル「カメラガールズ」に現在施工中のハッ場ダム(国土交通省関東地方整備局)の建設現場で写真を撮影してもらおうという企画で、彼女たちの視点を通して、現場の魅力や土木事業の重要



広告3

性を伝えようという試みです。

カメラガールズの皆さんの写真や撮影を通じて感じたこと、「当たり前に出ることは『土木のおかげ』と感じた」、「ダムを造ることで観光等の地域活性化」などを、新聞広告をはじめ、Webページの特設サイトやスペシャルムービーの公開、TVのCMや東京メトロの車内ディスプレイでの映像展開など、様々なメディアにより複合的に紹介しました。



広告4

■おわりに

今回の「ダムパシヤ」の広告展開については、当社として初めての取り組みも多く、チャレンジングなものでしたが、掲載後は一般の皆さんや社内から期待以上のよい反応が寄せられました。キャッチコピーの「ダムって、遠い存在だと思っていた。」「暮らしのそばに、じつはドボク。」を読んで、ダムって実は身近な存在だったのだなと感じられた方が多くいらっしゃったようです。

今後も土木事業の魅力を伝えるため、積極的に情報発信を行っていきたいと考えています。

## Reports:

## 行事報告

## 第3回イブニングセミナーと秋の見学会

第3回イブニングセミナー  
「ハツ場ダムの歴史」

平成29年9月29日(金)、日本大学駿河台キャンパスにて、「ハツ場ダムの歴史」についてのイブニングセミナーが開催されました。ハツ場ダムは、調査着手から今年で65年となり、治水・利水の両面から首都圏にとってその完成が悲願となっています。ご存じの通り、本体建設に至るまでに紆余曲折があり、別の意味で世間に名を馳せたダムでもあります。

冒頭、家田会長の挨拶で、ご自身が関東地方整備局の事業評価監視委員会の委員長の時に、「ダム事業継続は妥当」という意見書を提出したというエピソードを紹介されました。

続いて、ハツ場ダムの様々な出来事の渦中におられた、まさにハツ場ダム事業のキーマンである国土交通省 関東地方整備局の前局長である



前関東地方整備局長 大西様

大西亘様にお話をいただきました。

まず、歴史的な経緯として、家康の利根川東遷が治水を難しくし、それが結果的にハツ場ダムを生んだこと、ハツ場ダムは首都圏にとって、いざという時に働く用心棒のような存在であること、利根川水系には多数のダムがあるがセンターの守備を担うダムは無く、ハツ場ダムがそれをカバーすることなどを非常に分かりやすくお話をいただきました。

そして平成21年の事業見直しから再開に至る過程について、4年近くにわたる本省治水課時代のご苦労と、当事者しか知らない話をお聞か

せいただきました。

そして最後に、色々と苦労はあったが、ダム事業の検証はやって良かったこと、一番うれしかったのは今年2月の定礎式で関東地方整備局長として挨拶できたことだと感慨深くお話しされました。

セミナーの最後には、東京大学の虫明名誉教授より、利根川・荒川流域圏において「ハツ場ダム」が果たす治水・利水上の役割について、関東平野における地盤沈下の状況などを交えながら、ダムの必要性について水文・水資源工学的な見地よりコメントをいただきました。



虫明名誉教授

## 秋の見学会

## 「ハツ場ダムと小布施の町並み修景・善光寺口再整備ほかを巡る」

平成29年10月10日(火)から11日(水)にかけて、群馬～長野を巡る、恒例の秋の見学会が開催されました。2日間とも絶好の秋晴れに恵まれ、非常に充実した見学会となりました。まず初日はJR軽井沢駅に集合し、(株)ガイアートが経営する白糸ハイランドウェイを經由してハツ場ダムへ向かいました。車中で事業内容について説明を受け、途中名勝

白糸の滝に立ち寄りしました。

次にハツ場ダムへ向かい、建設JV事務所での概要説明の後、ハツ場ふるさと館で名物ダムカレーを食べ、午後から現場見学へと向かいました。

現場ではまず右岸天端からダム本体全景を見た後に、下流側へまわり廃線となった旧吾妻線の線路敷を歩いてダム堤体近くへ行き、施工状況を見学しました。その後、原石山骨材プラントまでバスで移動し、骨材をダムサイトまで運搬する長距離ベルトコンベア(本体からの総延長約10km)や原石を運ぶ40t重ダンプトラックなどを見学しました。参加者

からは一様に、そのスケールの大きさに驚きの声が上がっていました。

その後、ハツ場ダムを出てから、日本国道最高地点(標高2,172m)の洪峠やスキー場で有名な志賀高原を経由、車窓から見える紅葉の美しさを堪能しながら、宿泊場所である湯田中温泉「よろづや」に到着しました。

2日目は、まず町並み修景で有名な小布施町の北斎館・小布施堂周辺を見学しました。昔からまちづくりに携わってこられた寺部幹事長より説明があり、その後各人周辺を散策したり、土産物屋などを見て回りました。





白糸の滝



ハツ場ダム左岸下流

次に、小布施6次産業センターに立ち寄った後、JR篠ノ井線の姨捨駅にある、JR東日本の豪華寝台列車「四季島」専用ラウンジを見学しました。姨捨駅から見下ろす善光寺平の景色は素晴らしく、束の間ですが四季島に乗ったような気分を味わいました。また昼食は、観月の名所である長楽寺で、精進料理でもある信州の田舎料理をいただきました。

その後、松代へ移動し、真田邸・

松代城址と象山地下壕の2班に分かれて見学を行いました。限られた時間でしたが、象山地下壕班は見学ルートの最先端まで到達し、記念写真を撮影しました。

最後にJR長野駅に移動して、長野駅善光寺口再整備の見学を行いました。長野市とJR東日本より、計画概要と工事の施工状況について説明を受けたあと、実際に完成した駅周辺を見学しました。市の方が「善光寺

さん」と愛着を込めて呼んでいた通り、長野のまちが善光寺を中心に作られていることを実感しました。

楽しい時間が過ぎるのは早いものの、盛り沢山の見学会もあっという間に終わり、参加者の皆さんは想い出とともに、長野駅をあとにしました。企画にご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

企画委員会・広報部会幹事長  
王尾英明(清水建設)

## Laboratory: 01



### 石積み学校を通じてあらたな景観工学に挑戦する真田純子研究室(東工大)

#### ユニークラボ探訪

当会の新企画「ユニークラボ探訪」の第1回が、さる11月8日(水)東京工業大学(大岡山)の真田純子環境・社会理工学院准教授の研究室にて開催され、約20名が参加しました。

まず学内の石積みを見学。学部1年生への実習を通じてキャンパス内の法面整備を行う取組みに、真田研究室のユニークさの一端を感じた次第です。実習後に降った大雨の際、自分たちの力で完成させた石積みを気にかける姿に、利用者から施行者へという社会基盤に対する意識の変化が見て取れ、感動を覚えたそうです。

その後講義室でなぜ今石積みなのか、ということと石積み技術の基礎を教えてくださいました。石積みは土を留めるのが目的でなく、農地などに

活用できる平地を作るのが目的であるとの話が目からウロコでした。

全国の棚田、段畑では、石積みが傷んでも修復の仕方が解らず放置されたり、安易にコンクリートで直し、せっかくの景観が台無しになっている。これに対し、石積みの技術を修復の実践を通じて伝承するために「石積み学校」を立上げ、2013年以来、徳島、千葉、東京などで、約20回



真田先生の指導を受けながら石積み体験

を重ねているとのことでした。

小型の法面モデルで石積みを体験し、石積み技術の基礎を学び、その難しさ、奥深さと楽しさを体感しました。家田会長をはじめ参加者全員が、初めての体験に童心に返って熱中し、野外での石積み企画を欲しいとの声も多く上がりました。次回の石積み企画に乞うご期待!

(白根哲也・三菱地所)



全員、石積みへの興味が高まりました



## News Letters:

## 活動報告

## 産学共働若手勉強会

## 柏の葉スマートシティを見学しました

今年度より本格的に活動を開始した産学共働若手勉強会では、1~2ヶ月に1回のペースでメンバーが集まり、AI・IoTをはじめとしたホットな話題に関する最新動向のレビューやディスカッションを中心に、外部のセミナーへの参加や現地見学会の開催などを通じて、次代を担う若手実務者と研究者の交流促進を図っています。

去る8月24日には、先進的な街づくりで名高い「柏の葉スマートシティ」を見学しました。同地域では現在、柏の葉キャンパス駅に近接する4つの街区(先行モデルエリア)とその周辺で開発が進められています。

人と情報の交流をベースとした創造的なビジネスのための最新のオフィス空間、住民の健康増進をサポートする各種サービス、街区を超えて

電力を融通しあう本格的なスマートグリッド施設など、「新産業創造」・「健康長寿」・「環境共生」の3つを柱とした課題解決型の取り組みをはじめ、ライフスタイル提案型の複合商業施設や既存の調整池を活用した自然共生型の親水空間などを見学し、参加者一同、大いに参考になった様子でした。

(日本大学・金子雄一郎)



エネルギー棟(電力融通装置、特高受変電設備、太陽光発電、蓄電池を備えた先進施設)



全体説明



柏の葉スマートシティとつくばエクスプレス(左)  
(手前は調整池を活用した親水空間)

## 産学協働留学生サマーセミナー連絡協議会

## 第6回留学生サマーセミナー「大都市の鉄道と地域開発2017」を開催しました

今年は「水と大地」の他に、9月7日~8日に渡って「大都市の鉄道と地域開発2017」を東京大学と政策研究大学院大学の主催で開催しました。当会会長の家田仁教授を委員長に、JR東日本、東京メトロ、東急電鉄、三井不動産、海外鉄道技術協力協会の共催で、2015年に続く2回目の実施です。様々な研究分野から14か国35名

の留学生が集まりました。セミナー初日は、東京メトロの山村明義社長による特別講義を始めとした座学を行い、二日目は渋谷駅改良工事現場、二子玉川駅周辺開発、東京駅のドームファサード及び駅ナカ、日本橋再生計画に関する見学会を実施しました。わが国の鉄道と都市の関わりを総合的に勉強する内容に、留学生たちからは常に

積極的な質問がなされ、大変満足度の高いプログラムとなりました。初日に開催した懇親会には、国土交通省の藤井鉄道局長、栗田都市局長にもお越しいただき、またこれまでの鉄道関係のサマーセミナーに参加した留学生アラムナイも招待したところ、10名ほどが参加し、大いに歓談しました。

(長岡技術科学大学・鳩山紀一郎)



東京メトロ山村社長による特別講演



懇親会にて集合写真



渋谷駅改良工事現場見学の様子



## 当会の会報・HPが 刷新されます

～広報媒体リニューアルのご挨拶～

(一社)計画・交通研究会では、イブニングセミナーや見学会などによって、会員企業や個人会員の業界・分野・年代・キャリアを超えた交流が行われてきましたが、新企画や特別講演会の実施や活発なプロジェクト活動などにより、その交流は一層活気づいています。これに伴いまして、広報部会では広報媒体のリニューアルを行っております。

会報では前号9月号で誌面レイアウトを刷新し、続く本号では定型をお届けいたします。1ページ目では目次のほかお知らせを配置し、会の「今」が一目で分かるようにいたしました。また重要な最終ページには、業界や分野を牽引される方々からのご意見等を、より印象的な縦書きのレイアウトでお伝えいたします。行事報告のほか、イブニングセミナーなどと連動したテーマの企画記事や会員企業の活動を多面的な視点でとらえる記事、書評、コラムなど多彩

な読み物が加わり、発信・交流・報告を拡充していきます。

一方でホームページ(以下、HP)のリニューアル作業も進めております。部会にはこれまで以上に若い年齢のメンバーや女性が増え、新たな視点も加えながら作業を進めています。

現在、HPでは2001年以降の会報が公開されていますが、会の歴史と実績の重みを受けとめながら、会報とHPは会の「顔」としての存在を強め、会の活性化の一助として、より「分かりやすい」「見やすい」「使いやすい」「楽しい」媒体をつくりたいとの思いで部会員一同、制作に携わってまいります。今後とも会員の皆様のお力添えをいただけますよう、どうぞよろしく願いいたします。

企画委員会・広報部会長  
茶木 環  
(作家/エッセイスト)

### 一般社団法人 計画・交通研究会

Association for  
Planning and Transportation  
Studies

〒100-6005

東京都千代田区霞が関3-2-5

霞が関ビル5F-28

TEL 03-4334-8157

FAX 03-4334-8158

E-Mail: jimukyoku@keikaku-kotsu.org

Homepage: <http://www.keikaku-kotsu.org/>

#### 理事会

代表理事・会長 家田 仁  
理事・副会長 屋井 鉄雄  
理事・副会長 清水 英範  
理事・幹事長 寺部慎太郎  
理事・事務局長 高橋 祐治

#### 経営委員会

委員 大嶋 匡博・城石 典明  
廻 洋子

#### 企画委員会

委員 小野寺 博・大串 葉子  
真田 純子・下大藪 浩  
杉原 克郎・高瀬 健三  
寺村 隆男・水野 高信

#### 企画委員会・広報部会

部会長 茶木 環  
副部会長 羽藤 英二  
幹事長 王尾 英明  
部会員 遠藤 秀彰(本号編集担当)  
久嶋万祐子・斎藤 功次  
白根 哲也・清 衣里奈  
田中 啓之・中道久美子  
平田 輝満・松本 剛史  
渡邊 武彦  
柳沼 秀樹(HP担当)

デザイン/レイアウト 新目 忍

## Opinion:

## 視点

## 変化への適応リスクを超えて

「技術の未来」を語る近年の論者は、その結論において、「人類は賢いから判断を誤らない」とか、「民主的議論の末に正しい選択は可能」などと言う。最近では「人類は必ず技術の活用を誤る」といった論調も見られるが、誰も今の破壊的な技術革新の流れを止められないだろう。さて、6月のEASTS基調講演でも述べたが、この点に限って少々補足したい。

破壊的(disruptive)な技術という言葉が頻繁に登場するようになった。内容は多岐にわたるが、その進化の速度から、我々の「直観リセット」が必要な時代という。今日の非常識が翌日には可能になる。情報時代の次の時代を拡張時代(Augmented Age)と呼ぶ人もいるが、Society 5.0と言えば人間を取り巻く社会のイメージが想起されるのに対して、拡張では人体や五感、あるいは脳の強化・拡張等がイメージされる。どうやらそのあたりに大きな課題が潜んでいるようだ。

破壊的な技術革新のことを改めてTechnology Changeと呼んでみよう。現代世界が既に直面しているClimate Change、自然変化に対比される技術の変化である。実はこれら2つに加えて深刻な変化が予期される。それはMind Change、我々人間内部の変化である。これら3つの変化は良い面も悪い面も持ち合わせる。Mind Changeは英国の研究者等が主張するが、従来から言われるゲーム

脳とは少々違う。筆者はこれらのチェンジ自体は、受け入れざるを得ない変化だと思うが、変化への適応、特に技術変化への適応に特に注意すべきと感じる。

例えば、気候変動に対する適応リスクであれば、植生の北上に伴う何らかの対策が副次的影響をもたらすような状況を想定できるだろう。他方、Technology Changeでは、英国の別の研究者がエンベロープという一般概念で説明するように、人間が機械に適応するように行動することで、無意識に行動や思考を狭める問題が指摘される。極端な例は映画サロゲートの世界である。アバターに仕事を委ねた結果、人間は安全に外出すら出来ない社会に生きる。AV、I/OX、XaaSの世界で、我々の行動や思考がどう変化するか予測できない。

また、現在の検索エンジンは、我々の想像力を喚起する役割も担う。知りたいことが次々と連鎖し深まれば、そこからアイデアも生まれる。しかし、検索エンジンのAI化が飛躍的に進化し、視覚で捉えたものや頭で想起したことまで瞬時に解説されるようになるのだろうか。Mind Changeで指摘されることは、そのような環境下では記憶を脳の中に保つ必要がなく、脳はAIから情報を引き出すアドレスさえ覚えれば良いことになる。記憶内の様々な知識を結びつけて知恵として生かすスロージ



屋井鉄雄 当会副会長

東京工業大学 副学長・教授  
1980年東京工業大学工学部卒

ンキングの思考様式を人類が失うかもしれない。筆者はこれらICTの劇的な進化への適応上のリスクを、「革新者の創造力が一般の想像力を劣化させ得る(The creativity of innovators may lessen the imaginative power of people.)問題」と捉えている。国や地域で重大な判断をする際に投票等を通じた国民の選択が行われる限り、大げさに言えば人類を劣化させないことが最重要な課題だ。スマートメータで生理欲求を、自動運転で安全欲求を、SNSで所属欲求を満たすことは大いに結構。だが、自己実現欲求までAIに任せようになれば、重大な局面で「判断はAIに任せれば間違いない」と選択するだろう。これを社会が行うようになればシンギュラリティ、また技術の誤用でもあろう。Augmentedは人類の能力を高め役立っだろうが、筆者は「現実世界への関心」、「未来への想像力」という2つを国民が自ら維持できる国家運営、地域運営が必要と考える。たとえば、計画という地味な分野があるが、地域計画等の未来を構想する取り組みに、今からでも主権者である国民を積極的に関与させる必要がある。新自由主義以降、時代は逆を向いてきたが、「一身独立し一国独立する」から150年余り。人類生存のためにはAIからの「一身独立」のマインドで共存を探ることが求められると思う。